

光の王国 カーテンコール 1

純白の女神

カーテンコール 純白の女神

この作品は『生まれ来る者たちへ』最終章の後でお読みください。

「うわぁ……」

奈子は思わず感嘆の声を上げた。

「ダルジイ、すごくきれい！」

それはお世辞でもなんでもない。心からの言葉だ。

光沢のある純白のドレスに身を包んだダルジイの姿は、まるで美の女神の祝福を一身に受けているかのようだった。

「……ありがとう」

顔を赤らめて応えるダルジイは、慣れない格好に少々戸惑っているようだった。

当然といえば当然だ。女性騎士が精一杯着飾る数少ない機会である公式のパーティでさえ、化粧つきのない騎士の礼服姿で出席してきたダルジイである。

それでも十分に美しかったものだが、豪華なドレスをまとって化粧をした今の姿は別格だった。

そう。

今日は、ハルティとダルジイの結婚式なのだ。

当然、奈子や由維たちも出席する。

「……これで、礼服派の女騎士はアタシ一人か」

頭を掻いて言う奈子も、騎士の礼服姿である。

性格的にも容姿的にも、ダルジイ以上にドレスは似合わない。

これまで二人とも、すべての公式行事を礼服で通してきたが、この国の王妃となるダルジイは、今後はそうもいかないだろう。

「ところで、ナコはどうして一人でここに？」

「ん？ ちょっと、周りがうるさいんで逃げてきた。しばらく匿って」

「匿う？ お前いったい何を……」

不思議そうにつぶやいたダルジイは、やがて「ああ」とうなずいた。ふっと失笑を漏らす。

「なるほど、そういうわけか」

「そーゆーわけ。もう、いい加減にしてほしいよ

ね。アタシには、ちゃんと連れがいるのに」

「……とはいえ、普通の人間には理解されにくいだろう？」

「まあね」

諦めの混じった苦笑を浮かべ、奈子は肩をすくめた。

今いるのは、花嫁の控え室。

そして奈子が逃げてきた相手とは、マイカラスの貴族たちだった。

最近、奈子は異様にもっている。

女の子にはいやというほどもってきた奈子だが、これまでの人生の中で、ここまで異性にもてたのは初めてだ。

奈子を狙う若い貴族の子弟たち。あるいは自分の息子やら甥やらの嫁にしようとは策する大貴族たち。

ひとたび公の場へ出れば、奈子の周囲にはたちまち人垣ができる。

無理もない。

奈子も一応、客観的には美人である。

マイカラス一の女性騎士でもある。

その上、国王ハルティとは非常に親しく、信頼されている。

先日のカイザス王国との戦いで多大な功績を挙げ、かなり広い領地を得ている。

アール・ファアラナーの再来として、民衆の人氣も高い。今現在、一番の売れっ子といってもいい。

そんな有力な騎士を自分の一族に引き込むことは、どの貴族にとってもメリットが大きいことだ。しかも奈子は、これまで貴族たちの派閥とは一切無関係だった。それだけに、誰も彼もが言い寄ってくる。

今日も、そうだった。

いい加減うんざりして、男子禁制である花嫁の控え室へ逃げてきたというわけだ。

ダルジイの身支度を終えた侍女が、奈子にお茶を出してくれる。

「まあ、仕方あるまい」

「あんたは、そーゆーことなかったの？ ハイ

ダー家の一人娘っしょ」

お茶のカップを傾けながら、奈子は訊いた。

名門の一人娘で、優れた騎士。

今の奈子ほどのフィーバーぶりではなくとも、かなりもてたはずだ。持ち込まれた縁談も、一つや二つで済むはずがない。

しかし。

「さあ……」

ダルジイは心当たりなさそうに首を傾げる。とぼけているという様子ではなかった。

「興味、なかったから」

「それもそっか」

言われてみれば、そうかもしれない。

子供の頃から、一途にハルティを想い続けていたダルジイである。いくら他の男に言い寄られたり縁談を持ち込まれようと、まるで眼中になかったのだろう。

「あんたは、ハルティ様一筋だったんだもんね。

よかったね、夢が叶って」

「ああ……、まあ、そうだな」

歯切れの悪い応えに、奈子はおやつと思った。

先刻から、ダルジイはどこか元気がないように感じるのだ。

「どしたの？ いわゆるマリッジブルーってやつ？」

「というか、まあ……いや。ちょっと、緊張してるだけだ」

「へえ……」

意外に思いつつも、つい笑ってしまった。

「泣く子も黙るマイカラスの戦姫が、自分の結婚式に怖じ気づくとはね」

「……慣れてないんだから、仕方ないだろう」

「自分の結婚式に慣れてる女つてのもどうかと思うけど……。敵の大軍相手に单身突っ込んでいく勇氣はあるくせに」

「それとこれとは話が別だ。それに、問題は結婚式じゃないんだ」

「え？」

「結婚式じゃなくて、その後……」

「後、つて？」

話が見えずに、奈子は目を瞬いた。

ダルジイはどこことなく不機嫌そうな表情で、しかし少し頬が朱い。どうやら、恥ずかしいのを隠しているらしい。

周囲を見回して、侍女たちが少し離れたところにいるのを確認すると、小さな溜息をついて、奈子にだけ聞こえるようにささやいた。

「……お前に相談するのも癪だが、やはり経験者に訊くべきだな。つまり……その……」

「うん？」

「夜、の……ことなんだ」

「夜、つて……」

そこで、奈子の目に理解の色が浮かんだ。思わず吹き出しそうになるところを、ダルジイに口を押さえられる。

「わ、笑うな。私は真剣なんだ」

怒りと恥ずかしさのために、ダルジイの顔は真っ赤になっている。

「あはは……うんうん、そうだね。ぶっ、くく

く……確かに、それは女の子には大問題だ」

奈子は身体をよじった。大笑いしたいのを無理に堪えているので腹筋が痛い。

あのダルジイが、今夜の、ハルティとの初夜を不安がっているとは。

初めて見る、ダルジイの女の子らしい一面だった。

「い、一応、頭ではわかっているつもりなんですが。……一度も、実戦を想定した訓練をしていからな。いざというときにちゃんとできるかどうか……」

訓練を積んでから初夜に臨む花嫁もいないと思うが。ダルジイはこれで真剣らしい。

世間一般の基準とは、かなりかけ離れた少女時代を過ごしてきたダルジイである。仕方のないところだろう。

「その……お前は、経験豊富なのだろうか？ アドバイスというか、なんというか……」

「経験豊富って言い方は、ちょっと引つ掛かるけど」

奈子本人はそんな自覚はないが、しかし初体験

は十四歳で、これまでに男性経験三人、女性経験はその数倍。その相手は一人を除いて恋人ではなく、しかも妊娠と流産まで経験している。

援助交際で稼いでいる女子高生でもないのにこの経歴は、十分に「経験豊富」という評価に値するだろう。

（はあ……汚れちゃったなあ、アタシ）

奈子は小さく溜息をついて、それからダルジイに意識を戻した。

「不安になる気持ちはわかるけどさ、なにも心配しなくていいと思うよ」

「え？」

「最初のうちはただ黙って、ハルティ様に任せとけばいいんだよ。向こうは経験者なんだし」

「そ、そうなのか？ まあ……そうだろうな」

「そうそう、素人が付け焼き刃の知識でどうこうする必要ないって。ハルティ様のリードに身を任せれば、なーんも心配なし。ハルティ様は優しくしてくれるし、しかもすごいテクニシャンだし。ダルジイが初めてだって、きつとすぐく感

じちゃうよ」

軽い調子でははーと笑う奈子は、その場の空気が変化していることに気付いていなかった。

「ナ」……」

ダルジイが低い声で言う。

「ん？」

「お前は、何故それを知っている？」

「え……、ああっ！」

奈子は慌てて口を押さえる。

ついポロツと大変なことを喋ってしまった。

ダルジイの目が妖しく光る。

「……で、どうしてお前はそんなことを知っているんだ？ まるで、自分の目で見てきたみたい」

「え……あ、あのっ。つまり……そのっ……」

なんとか言い訳を……と思っても、頭がパニツクを起こして何も思い付かない。

ダルジイが一步、近付いてくる。

奈子は一步、後ろに下がった。

「あ……あはは……その、ね、落ち着いて？ 怒

ると、せつかくの美人が台無し……いいっ？」

ドレスの裾がばつと翻ったかと思うと、いきなり斬りつけられた。紙一重のところまで辛うじてかわしたものの、前髪が数本、宙に舞った。

ダルジイが、短い剣を握っていた。どうやらスカートの中に隠していたらしい。

真剣を持って結婚式に臨む花嫁というのも信じがたい話だが、ダルジイであればありそうなことだ。

ハルテイのため、ハルテイを護るため。

ただそれだけに己の人生を賭けてきたダルジイである。たとえ自分の結婚式だろうと、武器を手放すはずがない。特に今日は、ハルテイの一番近くにいたのは彼女なのだから。

もし万が一のことがあった場合でも、ハルテイだけは護る。そんな想いで剣を隠し持っていたのだらう。

しかし危ないところだった。

隠し持つために短い剣だったから、ぎりぎり届かなかったようなもの。これが普段のダルジイの

長剣だったら、今ごろ命はなかったかもしれない。慣れない武器で、わずかに踏み込みが甘かったのだらう。

「ちよっ……ダルジイ！ それは洒落ンなんないって！」

「もちろん、冗談ではない。結婚式の前に邪魔者は片づけておく、考えてみれば当然のことだな」

「ちよつと待った……ハルテイ様とのつ、ことはっ、もっつ、昔のつ……それにつ、あればっ、一度っ、だけのっ！」

立て続けに繰り出される剣をかわしながら、奈子は必死に弁解する。

騒ぎを聞きつけた侍女たちが、血相変えて飛んできた。

「いけませんお嬢様！ 大切な結婚式の前にそんなもの振り回して！」

「ええい放せ！ あいつを始末しない限り、安心して結婚などできん！」

「いけません！」

三人の侍女が両腕と腰にしがみついて、ダル

ジイを抑える。

危機を脱した奈子はほつと息をついた。いくらダルジイだって、人が見ている前でキレたりはしまい。

しかし。

「お嬢様、いけません」

侍女の一人が、強引に剣を奪い取った。

「そんなことをしたら、せつかくのドレスが血で汚れてしまいますわ。もうじき式が始まります。もう、着替えている時間もありませんからね。私がお代わりにやっておきますから、お嬢様は式場の方へ」

「……って、お前らグルか　っ！」

ここに自分の味方は一人もいない。そう感じた奈子は、全速力で控え室から逃げ出した。

* * *

「どこ行つてたんですか？　そんなに息を切らして」

隣に立った由維が、小さな声で訊いてくる。

「いや……まあ、いろいろと、あるんだよ……」
肩で息をしながら、奈子は引きつった表情で応えた。

剣を片手に追ってくる侍女をまくのに、ずいぶん手間取ってしまったのだ。

まさか侍女までがあんなことをするとは意外だった。しかし考えてみれば、ハルティが奈子のことを必要以上に気に入っていたことは、貴族たちの間ではかなり知られた話だ。ダルジイの侍女たちのような「ハルティ陛下とダルジイお嬢様をくつつけよう」派の人間にしてみれば、奈子の存在は目障だったに違いない。

(こつなると、式の後が怖いなあ……)

神殿の大きな扉が開いて、ハルティとダルジイが入場してくる。とりあえず、式の間だけは安全だろう。

まさか本当に殺されるとは思わないが、嫉妬に狂った女は何をするかわからない。先刻のダルジイには間違はなく、殺意が感じられた。

「うわぁ……ダルジイ、きれい……」

参列者の間をゆっくりと歩いていく二人を目にして、由維は小さく感嘆の息を漏らした。

ダルジイが、ほんの少し頭を動かす。一瞬、こちらを見たような気がした。

口元に、微かな笑みが浮かんでいる。

奈子には、般若の笑みに見えた。

(こ、殺される……)

全身から冷や汗が吹き出す。

「ダルジイ、こつちをみて優しく微笑んでましたね。あれはきつと「次はあなたたちの番ね」って意味ですよー？」

由維はどこまでも脳天気だ。

しかし奈子にはわかつている。あれは「これが終わったら、お前を殺す」という笑みだ。

ダルジイにしろリユースにしろ、どうして奈子の周囲には一途で嫉妬深い女性が多いのだろう。何とかしなくてはならない。

「……由維」

奈子は、由維にだけ聞こえるように小さく言っ

た。

「この間話したアレ、今夜決行ね」

「……え？」

由維が驚きの声を上げる。

「……ずいぶん急すぎません？」

「とにかく結婚式が終わったら……ってことだったっしょ？ 善は急げ、ってね」

「善……なんですか？ なんとなく、逃亡者的な雰囲気があるんですけど？」

ギク！

やっぱり由維は勘が鋭い。

「それに、なにも準備してませんし」「準備なんていいよ。着替えとお金だけ持ってけば。とにかく、今夜ね！」

* * *

それはまた、別な機会に語られる物語である。

ハルティとダルジイの結婚式が終わるとすぐに、
奈子と由維は、二人だけで旅に出た。

奈子は、自分の目で見なければならなかった。
月を一つ失ったこの世界が、この先どうなっ
てゆくのか。

自分のしたことの行方を、この目で確かめな
ければならなかった。

* * *

「……なんてカッコイイこと言ってたけど、実
は浮気がばれて逃げ出したんじゃないですか」
「いや……まあ……はは……。それは言いつこ
な
し
っ
て
こ
と
で
」

こうしてマイカラスを跡にした二人の行く手に
どんな冒険が待ち受けているのか。

あとがき

え。

『光の王国』最終話以後のエピソードを描く『カーテンコール』シリーズ、いよいよ開始です。基本はコメディです。インタールドが名前を変えたようなもの。本編が終わったのに「幕間劇」とは呼べませんから。

本当はもっと早くに始めようと思っていたのですが、なにしろこんな話ですから、あの最終話の感動が台無しになってしまいそうで(笑)、少し冷却期間をおいてみました。

ネタはたくさんあるので、これからも気が向いたらちよこちよここと、他の作品の合間に『カーテンコール』を書いていきたいと思えます。

どうぞひとつお知らせ。

『楽園 (<http://novel.pekori.to/>)』が新システムになり、投票の方法が少し変わりました。

今後投票してくれる方は、検索フォームで「1

999年のDISKから「一般向」「作品名」を指定し、キーワード「光の王国」で検索して、投票ボタンを押してください。

最後に次回予告……といきたいところですが、まだ未定です。

現在、『たたかう少女4 くキャット・ファイト』を執筆中……ですが、公開時期は未定。その前に『マリア様』小ネタを予定しています。それではまた、新作でお会いしましょう。

二 一年九月 北原樹恒

kisune@nifty.com

創作館ふれ・ちせ

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kamuychep/chiron/>

『光の王国』公式HP

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kamuychep/mila/>

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。